
ポケモン文学 ～永遠の歌姫～

鏡花水月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン文学　　～永遠の歌姫～

【Nコード】

N3529U

【作者名】

鏡花水月

【あらすじ】

歌うということ。それに才能を持ち、開花させたポケモンがいた。彼等は、総称して『音魂使い』と呼ばれる。様々な力を使役するが、その強大さ故に迷い苦しむこともある。それを学んだポケモンは、どうすればいいのだろうか。果てしない旋律の、甘く儚い物語。

本作中に記載されている歌の歌詞は全て作者により作詞され、また、それに酷似する若しくは同一のものがあつたとしても、作者がそれを知らなかったためであり、既存曲の歌詞の転載を行う意図は作者にはないことをここに明記します。

Prologue

「早く来て、ヒヨウサ。私の、終わりなき存在」

ヒヨウサは、夢の中でうなされていた。ピカチュウ族特有のギザギザの尻尾が恐怖でガクガクと震えている。

「ねえ、ヒヨウサ」

呼びかけている女性は、暗雲に包まれていて、正体が見えない。だが、確実に彼の心を蝕んでいる。

「は…… ああ、ああつ？ やめろっ？ やめてくれ？」

少年にしては高い、透き通った声が、苦痛で歪んでいる。

ヒヨウサはうずくまり、頭を支えるように抱えている。

「貴方は—— 誰だ！ 僕の何なんだ！」

苦悩の果てに絞りでた慟哭が響く。

「私よ。貴方の—— 歌姫よ」

“歌姫”というその言葉には、不穏な響きが聞こえた。その響きと共に流れてくる讃美歌。

『揺れる肩に 神の御子 その姿 清く儚く 辛い慟哭 我が身突き抜け 汝の身も 壊しつくす』

強い不協和音に、ヒヨウサの苦しみは最高潮に達した。

「や…… やめろ！ 10万ボルトオ！」

バチバチッ！ と電撃音が走る。少女の悲鳴を聞き、ヒヨウサは夢から醒めた。

Prologue (後書き)

どうも、鏡花水月です。新連載です。

今回、ヒョウサという名前のピカチュウが主人公となります。

性別が分かりにくい名前ですが、一人称が『僕』であることからも分かるように、れっきとした男ですwww

また、この小説では前書きに作者がアドリブで作った詩を掲載していると思います。

なるべく更新できるようにには頑張っているかなと思います。次回も楽しんで頂きますように。

今回はここらで括らせて頂きます。

D i s s o n a n c e : 1 富強の旋律（前書き）

『もし この世から 愛という言葉が消えたなら なんとつまらな
い 世の中だろう どんな風になるのか 想像すらも つきはしな
い』

Dissonance: 1 富強の旋律

「……ヒヨウサ……」

朝方のリビングにて。ヒヨウサの幼馴染である、グレイシアのエレナが不機嫌気味に呟く。

グレイシアは本来スカイブルーの体だが、エレナの体は茶色で、所どころ焦げている。勿論、色違いポケモンとかいうわけではない。今朝ヒヨウサを起こしにきた矢先、悪夢にうなされていたヒヨウサが寝ぼけてはなった電撃を喰らった結果だ。エレナが不機嫌気味なもの、そういうわけだ。

「い、いやごめんね、エレナ。ただちょっと悪夢を見たと言っただけなんだよ」

ヒヨウサが冷や汗を流しながら弁明する。勿論、エレナがそれで曲がったへそを元に戻すかと言えば、そうでもない。

「アンタねえ……これで何回目と思ってるの？ アンタを起こしに部屋に入ってきた私に、わけ分かんないことを口走りながら電撃を浴びせるの」

「……10回目？」

「そんなに少なくないわよ大馬鹿！」

「じゃあ5回目「何で減ってるのよ！」」

エレナのテンションが怖いくらい高いが、これが普通である。

彼女はうな垂れて溜息を吐くと呆れた口調で言う。

「悪夢ってことは……またアレなの？ 歌姫とかいう類？」

「うん。暗雲に包まれていて分からなかったけど……僕の耳に響いたアレは、いつもと同じ、歌姫だったよ」

ヒヨウサが言ったのを皮切りに、室内には沈黙が落ちた。やがてエレナがまた喋り出す。

「……珍しいものね。『音魂』使いのピカチュウなんて」

「待ってよ。ただ僕が珍しい種類のピカチュウだということはあつ

ても、それだけの理由で夢を見るなんて、おかしいじゃないか」

「でも、アンタは他のピカチュウと違って歌を使えるでしょう？」

そして、アンタの夢に出る者は、歌姫と名乗っていた。確かに理由はそれだけじゃないでしょうけどね」

エレナはそれきり黙りこむ。

この世には、歌の力を使い、不思議な魔力、所謂『音魂』を発現させて戦う特殊なポケモン、『音魂』使いと呼ばれるポケモンがいる。ヒヨウサもその端くれ。『音魂』使い“永遠の歌姫”だ。

本来、この手のポケモンにはハイパーボイス等を覚えるゴニョニョ、ドゴーム、バクオングや、プクリン族、ペラップ族などや、音を響かせるコロトック族、鳴き声を覚える種族のポケモンが多い。ピカチュウも、鳴き声を覚えることは覚えるが、何故かヒヨウサ以外の例が確認されていない。

「……そう言えば、昨日『音魂』で対戦相手を眠らせているプリンがいたよ。あれは凄かったなあ」

「それは『音魂』じゃなくて歌うっていうプリンの技よ大馬鹿」

能天気な呟くヒヨウサに、エレナはしっかりとツツコミを入れ、「確かに敵を眠らせる『音魂』もあるかもしれないけど」と付け加えた。ヒヨウサは大馬鹿と言われるのには慣れているので、特段変わったリアクションを見せることは無い

「じゃあちよつと朝の発声練習でもしていようかな……」

「ちよ、近所迷惑でしょうが！ やめなさ——」

エレナの制止も届かず、ヒヨウサの澄みきったソプラノが響く。

『ああ、神よ 大地は私を迎え入れ 空は歓喜の色を湛える ここに貴公の制裁を 加えるならば 私は鬼畜になっても 貴公の所業を 止めてみせよう』

それは、天使のような富強の旋律。だが、人々に歓喜を与えるものではない。

「きゃ、きゃあ！？ バカヒヨウサ！ 何『破碎の歌』なんか歌ってんの！」

エレナが頭を抱える。だがヒヨウサは歌うのを止めようとしない。エレナの頭が、響く不協和音によってキリきりと痛む。

「ああもう！ さつさと止まりなさい！ 氷の礫！」

即席の氷塊が、流れ星の如くヒヨウサの背中に突きささる。

「うわあ！？」

「うわあ、じゃないわよアンタ！ ここは住宅地のだ真ん中よ！ こんなところで『破碎の歌』なんか歌って、家が壊れたらどうするのよ！」

エレナが喚くのを、ヒヨウサはおどおどしながら見ている。住宅地、とはいえ広い草原に10m間隔で家が建っているというだけのことだ。

「だ、大丈夫だよ。近所迷惑にならないように音は落としてあるし、力もそこまで注いでないから」

「私が崩壊寸前だったわよ！ ちょっとは考えなさい馬鹿！ 馬鹿馬鹿馬鹿！」

「ま、まあよかったじゃない。体の汚れがとれたんだから」

よく見ると、エレナの体についていた、(ヒヨウサの10万ボルトによる)汚れはすっかり落ちている。だが、この汚れも元はと言えばヒヨウサのせいなので良かったとは言えない。

「アンタがつけた汚れをアンタの手で取り去っただけでしょうが！」

「……ま、まあね……」

エレナはウンザリしてきた。だが、1日はまだ始まったばかりである。

「ああもう……歌いたいなら、近くの森の中で歌って来なさい」

「森の中に行ったらポツポに迷惑がかかるよ」

ヒヨウサの歌った『破碎の歌』とは不協和音を利用して物理的・精神的にダメージを与えるというものだ。森のポケモンは彼の声には敵わないだろう。

「とにかく、こんな住宅地のど真ん中で歌わないの。次歌ったら、生まれてきたという事実を心から後悔させるわよ」

その言葉に、ヒヨウサは必至に首を上下に振る。エレナは、自分が言ったことを冗談では滅多に済まさない。

「分かったなら朝ごはん作るからさっさと手伝いなさい」

「はい」

ヒヨウサはエレナについてキッチンへ入っていった。彼女の炊飯を手伝う、などと言うのは既に日常の一部と化していた。

本来ここはヒヨウサと彼の両親の家だったが、彼の両親は2匹とも別の国で働いている。幼馴染のエレナも、毎日遊びに来ているうちに、草木寝静まる夜以外は入り浸ってしまうようになっていた。因みに、エレナの家族はそのことについて言及はしていない。家庭の事情から、言及などできない状態なのだ。

「ヒヨウサ、どっちが良い？ オレンの実とカイスの実」

エレナは両手に乗せた木の実を示唆する。ヒヨウサは暫く思案していたが、突然煌びやかな顔でエレナの右手を指した。因みに右手に乗っていたのはカイスの実である。

「分かったわ。じゃあカイスの実を私が食べるわね」

エレナ「……ッ！？」 とヒヨウサの渾身の叫びが木霊した。

「冗談よバカ。それから二度とそのソプラノを大音量で流さないで」冗談が冗談に聞こえない。それは彼女の特徴でもあり欠点でもあった。因みに、今のヒヨウサの叫びはエレナの耳にはかなりきつかったようだ。顔を顰めている。

「ソプラノなんて流してないよ。普通の高音だよ」

「またの名をソプラノでしょうが」

内容的には稀有だが、雰囲気的にはどの家とも大して変わらない会話が続く。

それぞれ木の実で作ったサンドイッチを食べ終えた。

「ご飯食べたなら、さっさとバイトに行くわよ」

「あ、僕はもう行くよ」

エレナが、食器を流しにつける。ヒョウサは、既にバイト先の病院へ行っていた。

D i s s o n a n c e : 1 富強の旋律（後書き）

ヒヨウサ

「始めまして！ この小説の主人公のヒヨウサです！」

エレナ

「アタシはエレナ。よろしくね」

えー、本格的に始まりました♪ 更新は恐らく超スローペースですが

ヒヨウサ

「いや、ちょっと（汗）」

エレナ

「2週間以上放置したら凍死させるわ」

いや、それはご勘弁を（汗）

さて、次の話ですが、ヒヨウサ達のほのぼのした日常を描こうと思います。といっても病院でバイトするほんの1日ですがw

では、お楽しみに。

D i s s o n a n c e : 2 幸せな日常の中（前書き）

『幸福は 君の全てを 祝福し 皆の希望も 世に知らしめる』

Dissonance: 2 幸せな日常の中

養い手がないヒヨウサとエレナの収入源は、近くの病院でのバイトである。

「こんにちは。バイトに来ましたよ」

エレナは頭脳が明晰であり、外来患者の接客にも長けている。

「あら、いらつしやいな、ヒヨウサ君、エレナちゃん」

人の良さそうな顔をしたミルトankのレイムが2匹を出迎える。

「こんにちは、レイムさん」

ヒヨウサは、その美しい響きを利用して入院患者の音楽療法を行っている。

「じゃ、エレナちゃんは外来の2番をお願いね。ヒヨウサ君は、13号室の患者さんのところに行っていて」

勿論、ヒヨウサの音楽療法は『音魂』を利用したものである。旋律を調整し、聴いているものの心と体を癒すようにしたのだ。ヒヨウサのこの技は、彼しかできないので需要に供給が追いつかないという難点はあるものの、普通の医療より手軽で回復する可能性も非常に高いので人気がある。

「13号室は……ケンタロスさん？」

「ええ。肺炎を患ってるのよ。『音魂』で治せるかしら？」

「うーん……病状を和らげることはできるけど、完治は難しいですよ」

「それで十分よ。お願いね」

レイムの朗らかな笑顔に押されてヒヨウサは13号室へ走っていった。

*

「14番でお待ちのレイヴン様」

エレナは外来窓口から呼びかけた。すぐにレイヴンと呼ばれたベト
ベトンが這いよって来た。

ベトベトンは女性からあまり好かれるタイプではないが、エレナは
嫌悪の感情を抱くことはあまりない。

「こちらに保険証を……」

もつとも、嫌悪を抱かない、ということは相手を好きになることも
ない、という事実を、エレナは裏付けてしまっている。彼女は見知
らぬポケモンと話す時、語調がとんでもなく平淡になっている。

*

『陽が沈み 星屑が 夜空の片隅から 眠りから醒めるように 優
しい夢のように 貴方に届いてくれる』

ヒヨウサのソプラノが、命の営みを讃えるかのように響く。

「君…… 噂以上に凄いな」

ケンタロスは、その声に聴き惚れている。

「いやあ、そんなことはないですよ」

「いや、上手だ。『音魂』使いと言われるだけのことはある。なん
という歌なのだ？」

ヒヨウサの謙遜に、ケンタロスは誠実な瞳を向けた。

「えつとですね…… 組曲『生命の源^{フナ}』です。病気を癒したり、落ち
込んだポケモンを励ます効果があるんですよ」

「なるほど、確かに聴いていて幾分苦しみから解放されたようだ。
今日は有難う」

「いえいえ、どういたしまして」

ヒヨウサはペコリと頭を下げ、ケンタロスの病室を飛び出した。
15号室の傍の角を曲がると、そこは病院の中庭が見える渡り廊下
で、そこで遊んでいる子供の姿が見える。

—— 子供って、ホント元気だよ。病氣したり、怪我して入院
していてもエネルギーに満ち溢れてるよ。

自分が子供であるという事実気付かず子供たちを見つめるヒョウサ。だが、その内ある一点が視界に飛び込んできた。

トゲピーと、ププリンの2匹がバトルしている。傍らには看護婦と思われるラッキーが2匹を見守っている。

だが、トゲピーもププリンも怪我が病気を負っているのか、動きが鈍い。それでも2匹はなんとか頑張っている。ヒョウサはたまりかねて、中庭まで降りて行った。そして、審判のラッキーのところまで歩いていき、話しかける。

「これって、リハビリですか？」

ラッキーはヒョウサに気付くと、少し微笑みを浮かべて軽快に答える。

「はい。2匹とも」

「そうですか……」

ヒョウサは静かに目を閉じる。彼に、トゲピーとププリンの苦しみの大きさを感じることはできない。でも、その苦しみを癒すことはできる。脳内に、『音魂』の魔方陣を思い浮かべ、ラの音から優しく高らかな声調で歌い出す。

『苦しみから 解き放たれ 自由を手にするとき』

「！？」

ラッキーがギョツとしてヒョウサを鑑みる。だが、その訝しげな表情は消えさり、ラッキーはすぐに目を閉じた。ヒョウサの声に聞き入っているようだ。

『私は 後悔などしない 貴方が狂いだすなら 一瞬で止める 楽にしてみせる』

中庭にいたポケモンがヒョウサの方を向く。ただ2匹、トゲピーとププリンが動きすらも止めない。それどころか、鈍かった動きが、患部をヒョウサの歌により癒され、機敏になっている。

「凄い……？」

聴衆の1匹が息を飲んだ。

*

「ヒヨウサ、帰ろう」

夕方、バイト代らしき封筒を持っているエレナがヒヨウサに帰るよう促した。本人はまだ歌いたいと言い張っていたが、

「さっさとしないと、先に帰って内側から鍵をかけるわよ」

というエレナの脅し文句で大人しくなった。

「……ヒヨウサ、今日随分と楽しそうに歌ってたわよね」

病院からの帰り道、エレナは柔らかな口調でヒヨウサに言った。

「そう、かな？」

「そうよ。凄かったわね」

「ハハ、そう直球に褒められると照れるな」

「ほ、褒めてないわよ。事実を言っただけだからね」

そう言っただけを向くエレナだが、凄い、という言葉は個人的な感覚を表す時に使われる表現であって、不変の事実とは異なる、ということに気付いてはいなかった。

「そう……ん？」

ヒヨウサは遠くから美しい旋律が流れてきていることに気付いた。声、ではない。何かの楽器と考えるのが妥当だろう。だが、ヒヨウサの注意を引き寄せたのはそんなことではない。

——音魂？

普通、音魂を意味も無く奏でたりはしない。周囲の環境に影響を与えかねないからだ。

つまり、音魂が流れている、ということは何かが起こっている、ということに他ならない。

「ごめん、エレナ。先に帰ってて！」

ヒヨウサはそう言い残すと音魂の聞こえた方へ駆けだした。

「ちよつ、ま、待ちなさい？」

後ろからの少女の制止の声を聞くつもりは、毛頭ない。

Dissonance:2 幸せな日常の中（後書き）

今回、冒頭の詩は五七五七七になってますw

ヒヨウサ

「なんだか早速急展開だな（汗）」

うん。次回、早速敵が出るよ。

エレナ

「なんかグダグダだったわね」

……スミマセン（泣）

さて、今回はとある楽器を持った『音魂』使いがヒヨウサの前に現れます。

お楽しみに！

D i s s o n a n c e : 3 深緑の楽器（前書き）

『貴方がここにいて、それでも夢は夢のまま、現で出会^うつことはできないの？』

Dissonance : 3 深緑の楽器

「……『音魂』を奏でていたのは、君？」

ヒョウサが辿りついた先は、針葉樹の木立の中だった。『音魂』の音源となる場所にいたのは、1匹のロゼリア。

「……また1匹、獲物が増えたわね」

ロゼリアは、『音魂』を奏でていた草笛から口を話すと、そう呟いた。

「獲物……？」

「音魂狩り（ノイズハンターズ）の功績がまた増えるわ……」

ロゼリアはそう言つてヒョウサに近寄った。その様子が妙に艶め^{なま}かしく、ヒョウサは唾を飲んだ。

「……貴方、私と戦いなさい」

「な、何を言っているんだ？」

ヒョウサは身震いする。頭の中で警鐘が木霊する。

——コイツは、危険だ！

彼の本能がそう告げた。10万ボルトでも放つて逃げようかと考えていたところ、後ろから声をかけられた。

「ヒョウサ、どうしたの！？」

「エ、エレナ……」

息を切らして走ってきたエレナを見て、ロゼリアは丁度いい獲物がある1匹増えたと考えているのだらう。

「フフ……そのグレイシアに判定して貰おうかしら」

「さ、さっきから何を言ってるの君！」

「私は“音魂狩り”ローズ。仕事は、名前通りよ」

ローズは、右手の赤い花をサツと振った。そこから、虹色の葉が襲いかかってくる。

「？」

「氷の礫！」

ヒヨウサは動けなかったが、エレナがそのマジカルリーフを相殺する。

「……音魂狩り……」

ヒヨウサはその名前を聞いて、戦慄を覚えている。何者かは分からないがとりあえず、自分にとっては危険な存在だ。

「か、帰ろう」

ヒヨウサは背を向け、駆けだそうとした。だが……

「させないわよ」

ローズは宿り木の種をばらまく。地面に落ちたそれらは、一瞬で大量の草木の柵を生やし、ヒヨウサとエレナをその中に閉じ込めた。
「なっ……くそ、雷パンチ！」

ヒヨウサが放った技は、宿り木の種には通じず、ただ鈍い痛みが拳に走るだけだった。

「ア、アンタ！ 一体どういつもりよ？」

エレナがローズに叫びかけた。だが、ローズはそれに答えない。

「じゃあ始めましょうか。勝負は簡単。私が草笛でこのグレイシアを眠らせるから、貴方は『音魂』でそれを食い止めて。10分経ってこの子が起きていたら私の勝利よ」

「……受けて立つ、しか無いみたいだね。君が何の為にこんなことをしているのかは分からないけど。『音魂』使い“永遠の歌姫”ヒヨウサが受けて立つよ」

ヒヨウサは、日本の中世の武士のように名乗った。勝負と言っても、今のローズの言葉からすれば10分歌い続けていれば良いだけのことだ。無理に逃げようとするよりは早くここから立ち去れる。勝手に勝敗の基準にされたエレナはいささか不満気な顔だが。

「“永遠の歌姫”……良い名前ね。なら始めるわ」

ローズは何処からか葉っぱを取り出して、そこから曲を奏で始めた。その瞬間に、ヒヨウサとエレナに眠気が襲う。

「草笛の技の応用か……」

このままでは負けてしまう。アイラは眠気を振り払うと、高らかな

高音を操り始めた。

『愛の闇から 永の輝き^{とこじえ}が 流星のように 現れる 忘れないで
この輝きを…… We are our senses and
abandoned comer to ?』

眠たそうに目を伏せていたエレナが、ヒヨウサの讃美歌を聞いた瞬間にビクツと体を震わせてその体を起こす。

「We are our senses and abandon
ed our chaos comer to …… 我々は混沌か
ら目覚める者、ね。そのままの意味でとると私の曲が混沌、とても
言うのかしら？ 人聞きが悪いわね」

「ちよつと気を利かせた皮肉、とは受け取れないの？」

ローズは少し顔を顰めたように見えた。だが、そこにすぐに微笑を取り戻し、また草笛を奏で始めた。制限時間残り7分。

「……『音魂』ってさ、相手に精神的、物理的にダメージを与える
だけに使われるんじゃないのよね。こういうことにも使えるの」

暫くして、ローズは草笛を止め、ヒヨウサを見つめながら言った。

アイラが彼女の行動を不審に思った瞬間、

ピーッ？

草笛から断絶音が流れ、ヒヨウサの視界が激しく明滅した。脳内を搔きまわされるような感覚に陥り、前後上下左右の感覚も一切分からなくなる。

「っ……」

混乱状態に陥ったと判断したヒヨウサはバッグから徐ろにキーの実を取り出して食べる。その間歌は中断されてしまったが、アイラが食べ終わるまでエレナは耐えてくれていた。

「危なかった……行くよっ！」

『目覚めよ 神の力 鮮やかに咲き誇れ 混沌の霧から 奇跡の蕾』

は もうすぐ開く……』

ヒヨウサは歌い始めたが、少し違和感を感じる。喉がおかしい……というわけでもなさそうだ。

「（な、何だ？ この感覚……何かおかしい……）」

「ヒヨウサ、音がずれたわよ？」

いきなり訪れた眠気を誤魔化すかのごとく、エレナは櫓を飛ばす。その櫓に、ヒヨウサは、この違和感の正体に気付いた。

—— 音程が合っていない！

「貴方の歌っているのって、『目醒めの歌』だよ。それ、キーを半音下に下げるとプリンの技の歌うと全く同じになるのよ？」

「？ くそ……」

ヒヨウサは焦ってキーを半音あげようとするが、うまくいかない。どうやらさっきの断絶音は音感を狂わせるものだったらしい。

「あ……あ……」

目醒めの歌と音程を合わせようとすると、何故か彼の喉には負担がかかってしまう。

『君が僕を 狂わせて 新しく 僕という 一個の存在を 作る』

その歌詞の後半の方から、ようやく音が合いだしたが、彼がその音で声を出すのは苦痛であった。

「ヒヨウサ、しっかり……」

必至にヒヨウサを励まそうとするエレナは、目を伏せていて、今にも地面に倒れ伏せ、眠り込んでしまいそうだ。制限時間残り5分

『後悔はしない 痛みも耐える だから目覚めよ 地底の底から破壊の……』

ヒヨウサの声は枯れ始め、力強さが感じられなくなった。エレナ

の意識は、最早風前の灯火に近い。

「エレナ、あとちょっとだから、それまで耐えて……」

そう言っ、エレナを励ますヒヨウサの声は、先程から無理に音を合わせていた為か、ひび割れている。

紡いでいる音も、ずっと1オクターブ低い。

「フフフ。ヒヨウサ、もう限界なの？ このままじゃ“永遠の歌姫”の名が廃るわよ？ ついでに、私はまだまだいけるわよ」

ローズの挑発に、反論する力すらもない。咳き込みながらまた歌を出す。

「負けないっ、絶対負けない……」

だが、歌いだしたその音は技の歌うと全く同じ音程だ。聞かせる者を起こしておく効果はない。

「しまった……？」

「も……もう、無理……」

さっきからふらついていたエレナが、急にその動きを止め、地面に倒れ伏した。

それが意味するのは、ヒヨウサの敗北だった。

D i s s o n a n c e : 3 深緑の楽器（後書き）

ヒヨウサ

「結局負けたんだね……」

まあ、そう気を落とさないで。

ヒヨウサ

「文章のクオリティがカスだし……」

……………（泣）

ただいま、とある小説にて鏡花水月の一周年の記念のイベントの募集をしております。

その小説のURLを貼っておくので、是非おいで下さいますようお願いします。

<http://ncode.syosetu.com/n44444u/>

応募は×切りました。

D i s s o n a n c e : 4 醒めない夢（前書き）

『夜空の彼方 古の叫びが 時を越え 物語を越え 私の胸に 灯
りを燈す』

Dissonance: 4 醒めない夢

「エ、エレナ？」

木立の中、ヒヨウサの悲痛な叫喚は、その喉を酷使し過ぎたのか、割れ鐘の鳴るような響きすら持っていた。

「……」

「エレナ、エレナ！」

揺り起こそうとヒヨウサがいくら叫んでも、彼女の瞼はピクリとも動かない。

——まさか？

彼の思考の中に、一抹の不安がよぎった。そんなこと、考えてはいけないと思っても、その不安の膨らみは、留まることを知ってくれない。

「勝負、あつたわね」

後ろから、ローズの冷酷な声が聞こえた。

「なら、私は帰らせてもらうわね」

ヒヨウサが振り返ると、背中を向けているローズの姿が視界に映った。刹那、彼の体が弾かれたように彼女の方へ飛び出していった。

——許さない！

彼の目はそう、言っているように見えた。

「戻せ、エレナを起こせ！」

そう叫んで掴みかかろうとした瞬間、体が動かなくなった。体が言うことを効かない、というより、首から下の感覚が無くなってしまったようだ。腕を動かそう、脳ではそう命令していても、その腕はダラリと下げられたまま、微動だにしない。

「っ！？」

「痺れ粉。麻痺状態を扇動して敵の動きを止める技よ。それじゃあね」

「——」

待て、と言いたかったのだろう、ローズの耳には何も聞こえなかった。

「1つ忠告ね、あの子は私の草笛と、貴方の歌で2重に眠り状態をかけられている。揺すっただけじゃ簡単には起きないわよ」

ヒヨウサの背筋に、氷を突っ込まれた時と同じ衝動が伝わった。

*

「——っく」

数10分程して、ヒヨウサはようやく麻痺から解放された。四肢に感覚が戻ってくるのと同時に地面に倒れ込んでしまったが、そう悠長にしてはいられない。咄嗟に立ち上がると、エレナの元に走り寄った。

「エレナ、エレナ？」

揺すりに揺すったが、ローズが嘲笑った通り彼女はスウスウと穏やかな寝息を立てているだけで起きる気配は見受けられない。

「お、起きてよ、エレナ？」

ヒヨウサは今にも泣き出しそうな声で呼びかける。あの時、『音魂』に誘われてこんなところまで来た自分が馬鹿だった、と軽率な行動を悔いたが、今更どうにもならない。今は、この状況を打破する以外すべきことはない。

「うっ、よっ」と

とりあえず、と微動だにしないエレナをおぶって家の方へ走り出した。

ここに来るまでは気付かなかったのだが、木立の中は苔で覆われた石多く、また陽も既に地平線の下で、相当走り難い場所だった。

だが、止まってはられない。早く家に辿りつかないと、という一心で走り続ける。時たま苔で滑り、近くの木に体を打ちつけそうになるが、背負っているエレナを必至に守る。既に所どころ打ち身が出来ているが、気にしない。

——もう少し、もう少しだ……

そう自分に言い聞かせ、軋む足に鞭を打ち走る。視界が白み始め、喉の隙間からヒュウヒュウと奇異な音が漏れ始めた頃、長久に続くかと思われた木々の数々が、視界から抜け落ちた。

「っ、着いた……」

奇しくも、30m前方にあつたのはヒョウサの家だった。安堵からか、一瞬足から力が抜けた。だが、ここで立ち止まってお終いだ、と奮いたち、足に力を籠める。

ガチャリ

30mは、そこまで長い距離には感じられなかった。家のドアを開けると、エレナをベッドに寝かせる。彼女はたまに泊ることがあるので、そのベッドを使っている。エレナの両親は、そのことについては何も論及しない。家庭の状況から、論及などしていられる状況でもないし、彼等が特段何か言うほどのことも起こっていない。

「……ごめんね、エレナ」

ヒョウサは久しぶりにまともに喋った。何だか、新鮮な感覚を覚える。でも、その言葉に返事をするべき者は、安らかに体を上下させるだけで何も言わない。

「……どうしよう……」

帰るべきところへ帰りついた、という安堵を感じるとともに別の心配が浮上してきた。

——あの子は私の草笛と、貴方の歌で2重に眠り状態をかけられている。揺すっただけじゃ簡単には起きないわよ。

起こす方法はあるにはあるのだろうが、何だろう？ 少し考えた末、棚から『眠気醒まし』を取り出し、エレナに飲ませた。だが、1分……2分……3分……効き目が現れた様子は無い。こうなればと片っ端から眠気醒ましを取り出して飲ませたが、結果は変わらなかった。

「どうすればいいんだよ」

困り果てたヒョウサは床に仰向けになった。猛烈な眠気に襲われ

たのはその一瞬後だった。

*

バコン？

けたたましい破砕音は、夢現ゆめげんの間にいたヒヨウサの目を覚ますのには充分だったが、エレナの眠りには効かなかったようだ。

「な、何！？」

ヒヨウサは跳び起きると、音のした方——丁度扉の方を見た。そこには、見るも無残にへし曲げられている扉と、その元凶であるう、拳を突き出して肩を怒らせているリングマだった。普通なら強盗か何か、と思って逃げようとするだろうが、ヒヨウサはそうはしない。それもその筈、そのリングマは知り合いなのだ。

「ガルバ！？」

それがそのリングマの名であるらしい。ガルバは起き上っているヒヨウサを見ると、幾分ほっとした様子で溜息を吐いた。その後ろからガルバの妹であるヒメグマのクリストが顔をだした。

「驚いたよ。ヒヨウサ君の家の前を通りかかったら、ヒヨウサ君が床で仰向けになってるんだもん。びっくりして、お兄ちゃんにドア壊させちゃった」

「ああ、ゴメンね。ちょっと疲れていて、ベッドまで歩く気力が無かったんだ」

クリストの文句に、ヒヨウサがそう言うと、ガルバも呆れ顔で妹に付け加えた。

「全くだ。理由があつたにせよ、あれは心臓に悪いぞ。一瞬、御前が本当に死んだかと思った」

「ゴメンゴメン」

ヒヨウサは苦笑しながら返す。彼としても、クリストの勘違いでドアを壊され、あわよくば近隣に死んだとさえ噂された可能性もあるので、お互い様としか言いようが無い。

「というより、おまえその傷はどうしたんだ？」

ガルバはヒヨウサの全身の打ち身を指さして訊ねた。ヒヨウサも、その類の質問が来るのは予測済みである。

「ああ、これ？ 実はさ——」

反射的に、状況を説明していた。否、状況を説明する、というよりは助けを求めるという表現がしっくりくるだろう。ヒヨウサは話した。バイトの帰り道にローズと名乗る謎のロゼリアに出会ったこと、そのロゼリアに、『音魂』を使った勝負を挑まれ、最終的に負けたこと。その敗北の結果、エレナが——

「目醒め無いんだ」

「そういうことが……」

ヒヨウサはうな垂れて、暗い感情を湛えた瞳を床に落としている。クリストが励ましを含んだ眼差しで、その顔を覗き込む。だが、その視線すら、ヒヨウサは自分への非難としか受け取れない。

「眠気醒ましでも効果が無い、となると相当深い眠り状態に陥ったみたいだな……」

ガルバはそう呟いて、何かを考えている面持ちになった。数分程して、考えが纏まったのか、再び話し出す。

「ヒヨウサ、御前『カゴの実』って分かるか？」

「カゴの実？」

その反応を見る限り、ヒヨウサは聞いたことが無いようだ。ガルバはカゴの実について、説明を加える。

「ああ。何でも、眠気覚ましの原料となる薬品なんだそうだ。その果汁を何1000倍にも薄めて使うんだ」

「何1000倍！？」

ヒヨウサは素っ頓狂な声をあげた。普通は眠気醒まし1つで、ノンレム睡眠のポケモンでもさつきまで眠っていたのが嘘であるかのように起きる。その液が、カゴの実には数1000倍で濃縮されているというのと同じだ。

「それ……凄い……」

ヒヨウサは驚嘆の溜め息を吐いた。それがあれば、もしかするとエレナは目覚めてくれるかもしれない。

「ああ、だがな……」

ガルバは一抹、沈黙を置いた。それは恐らく、ヒヨウサの希望に對する否定だろう。

「な、何？」

「そのカゴの実は、とても貴重なものだ。樹海の奥地まで行かないと手に入らないんだよ」

「えっ！？　じゃ、じゃあ眠気醒ましを作ってるポケモン達は……」
「当然、そこまで採りに行っている」

ヒヨウサは、頭を殴られたような感覚を覚えた。込み上げてきた希望が凍りつき、彼の鳩尾に落ちる。でも、現状ではカゴの實しか打開策がない。

「それに、樹海の奥には“番人”と呼ばれるポケモンがいる。そいつの許可も必要だが……それは時の運の一言に尽きる」

ヒヨウサの瞳は、また暗い影を取り戻した。

「だが、俺の知識以外ではカゴの實しかエレナを助ける方法はない……どうする？」

ガルバはヒヨウサを見つめた。それが、ヒヨウサにとって一番の負担になると気が付かずに。ヒヨウサは、おずおずと顔を覗き込んでくるクリストと、自分に一瞬でも希望を持たせてくれたガルバと、自分のせいで終わりの見えない眠りに堕ちてしまった少女を見つめて、そして言った――

「行くよ。その樹海まで。ガルバ、道を教えて」

D i s s o n a n c e : 4 醒めない夢（後書き）

ヒヨウサ

「あれ？ 僕名前変わったね？」

うん。やっぱりヒヨウサとした方がしっくりくるんだ。

ヒヨウサ

「あろうことが主人公の名前を変更するなんて……」

ま、まあいけないことだね； でも自分が納得いかない名前で通すか、自分の納得いく名前に変更するか、だったら私は後者を選ぶよ。

ヒヨウサ

「そうするのかぁ……」

D i s s o n a n c e : 5 あの日、記憶は鮮やかに蘇えり（前書き）

『少女の悲しみ 天上の神に届くなり 神その願いを叶へし時 英
雄の魂蘇へる』

Dissonance : 5 あの日、記憶は鮮やかに蘇えり

「ここが、その樹海だ」

言いだしてからヒヨウサの行動は早かった。その日の夕方に家を発ち、夜に一睡もせず歩き続け、カゴの実があるというその樹海の入り口にまで辿りついた。もっとも、それに付き合わされたガルバはたまったものではない。彼は不機嫌そうな様子でヒヨウサに言った。

「1度入ったらでるのは難しい。入口から奥地まで、なにか自分が行った後の印をつけておいた方がいいぞ」

「それなら大丈夫」

とヒヨウサは1振りの剣を取り出した。ヒヨウサの背と同じくらいの長さで、鐔のところは少し凝った装飾を施してある。どうやら、これで木を切りつけて目印にすると言いたいようだ。

「お前、凄いな……」

ガルバはある意味で感嘆のため息を吐いた。ヒヨウサの持っている剣は彼の身長と同じくらいある。しかしながら、彼は苦も無くその剣を体の一部のように扱っている。

「そうだ、御前この樹海の中で『音魂』を使うなよ」

「え？ 何で？」

ガルバの忠告の本意が理解できず、ヒヨウサは首をかしげる。

「『音魂』がこここの環境を捻じ曲げたら、番人も怒るだろう。ひいてはカゴの実を渡してもらえない、ということになるぞ」

「なら気をつけるよ。じゃあ、行ってくるね」

ヒヨウサは剣を鞘にしまいつつ、ガルバに手を振った。

「ああ、気をつけるよ」

ガルバも、ヒヨウサに手を振り返した。

「てやつ！」

ヒヨウサは軽くジャンプすると近くの木に斬りつけた。さっきからこの作業を何度繰り返しただろう。後ろを振り返ると、傷つけられた木々が、その中身を晒して葉を茂らせていた。

「だいぶ進んだかな……」

樹海に入ってから30分経った。彼としては結構進んだ方なのだろうが、現実ではこの広大な樹海の1000分の1以下の距離を歩いただけに過ぎない。

「まだまだ、先は長いから、早くしないと……」

ヒヨウサはそう独り言を呟きながら近くの木に斬りつけた。それが災難を呼ぶことになる……

「やあ！　とう！」

ヒヨウサは剣を振りながら目の前に生い茂っている蔦を切っていた。彼の剣はそう鈍らではなく、ちょっと一振りすれば蔦はすぐに断裂した。

その内に、蔦が殆ど絡まなくなったので、ヒヨウサは10万ボルトで蔦を吹き飛ばした。

「まだか……」

ヒヨウサは鞆から方位磁石を取り出して見ると、すぐにしまい、目印の為に近くの木を切る。その瞬間、叫び声が木霊した。

「あーっ、アイツだ！」

ヒヨウサが何事か、と思って見渡すと、ガサガサッ、と何かが走ってくる音がした。反射的に、剣を構える。

だが、走ってきた者達は、そのままヒヨウサに襲いかかりはしなかった。彼を取り巻くように、足を巧みに捌く。総勢、5匹

「お前か。我々の縄張りを侵したものは」

氷のような冷たい声がヒヨウサの耳を刺す。ポケモンは、黒い体に少量の紅い毛を、更に断頭台のように鋭い爪を持っていた。5匹の内1匹は頭と首周りに、紅い飾りがあった。

ニユーラ。そして、その頭領と思しきマニユーラ。

「縄張りなんて、侵していないよ。僕はただ求めるものがあってここに来ただけだ」

ヒョウサは、常では信じ難い程低い声で応じた。だがマニユーラ達は警戒の体勢を解こうとしない。

「嘘を吐け。我々の縄張りの木に、切り傷をつけただろう」

その言葉に、ヒョウサは己の失策を悟り、心臓を冷たい手で掴まれる感触を覚えた。

ニユーラは、縄張りの木に爪で傷をつける習性を持つ。つまり、ニユーラ族の縄張りの木に、傷をつける、という行為は——？
「殺せ！」

マニユーラが手下のニユーラ達に指示を出す。途端に4匹のニユーラ達が迫ってきた。1匹が冷凍パンチで襲いかかってくる。

「よっ！」

ヒョウサは跳び撥ね、その攻撃をかわす。ニユーラ達の包囲から抜け出た形になった彼は、咄嗟に歌おうとして、ガルバの忠告を思い出した。

——『音魂』が環境を捻じ曲げたら、カゴの実を手に入れられなくなるぞ。

慌てて口を閉じ、剣を大上段に構える。ニユーラと、マニユーラに同等に意識を向けながら眼でその間合いを測る。ニユーラ達も、攻撃的なヒョウサの姿勢に迂闊に攻撃するのを躊躇っている様子だ。
「どうしたお前ら！ さつさと殺しにかかれっ！」

マニユーラが苛立っているような口調で命令する。

「そんなにすぐに短気になるようじゃ、君の器が知れるよ？」

ヒョウサは出来るだけ威圧的になるように口元に笑みを浮かべながら言った。マニユーラはすぐに言い返した。

「元々知れぬほどの器など、俺もコイツらも持っておらんわ」

「そっ……野蛮だね。だからこそ、ここに住んでいるのかもしれないけど」

ヒョウサの、ピカチュウ特有のギザギザの尻尾が揺れる。1匹のニューラが飛び出してきた。冷たく光る爪を、断罪のように振り下ろす。ヒョウサはそれを剣で受け止めた。ガキンッ！と音が鳴る。『音魂』を使ってはならない——ガルバはそう言った。だが、1曲、自然への影響が一切懸念されない歌を、ヒョウサは知っている。今は、ただ必至に剣を振るう真似をしておく——

「やああ！」

ヒョウサは頬をバチバチと言わせ、体中を帯電させた。空気がビジッ、と電気音をたてる。

「何……？」

ヒョウサと斬り結んでいるニューラが目を向いた。次の瞬間、ビジャアア？ と奇怪な音をたててニューラが吹っ飛んだ。

「成る程、伝導体の剣を使ってこいつの体に電流を流したのか」

マニューラは倒れているニューラを冷たい眼で見降ろしながら淡々と喋る。ニューラは、致命傷とまではいかないだろうが、倒れているには等しい。

ニューラはまだヒョウサを警戒しているようだ。爪を構えたまま、動こうという気配を見せない。マニューラは、冷静な感情の塊になり、ヒョウサに攻撃を仕掛けようかどうか、まだ迷っている。華奢なだけのピカチュウと思っていたポケモンが以外にも強かったのだから、当然の判断と言えるだろう。ヒョウサはニツと唇の端を持ち上げた。そして、圧迫感溢れる声でたたみ掛ける。

「どうしたの？ 怖気づいた？ なら、こちらから行かせてもらおうよ」

ヒョウサは腰に剣を当てて、攻撃の前兆を見せる。瞬間、マニューラ達は予想されるべき攻撃に、思わず身構える。

刹那、ヒョウサはバネに弾かれたように飛び出した。振り下ろされた剣は1匹のニューラにあっさり受け止められる。ヒョウサは即座に斬り結ぶのを止め、横から振り下ろされた爪を受け止めた。咄嗟に、別の方向に電撃を飛ばす。その斬り合いは、数分続いた。

——何だ、あのピカチュウ。強がっておきながら、随分とよわっちじゃないか。

マニニューラはヒヨウサに対する見解を変えた。剣の裁き方は腰が入って無くてよろしているし、技を使わせてもそこまでの威力が見られない。要するに、見た目通り華奢なだけだった、というわけだ。ニューラ達も、次第に手加減してヒヨウサで弄んでいるようになっていく。

——これは、俺が手を出せば終わりかな……。

マニニューラが頬を緩めた時だった。辺りを劈く、硝子を引っ掻くような音が響き渡ったのは。ニューラもマニニューラも、耳を抑えてうずくまる。ついでに言うなら、先程ヒヨウサにやられたニューラも耳を抑えて悶絶している。

そんな中で、ヒヨウサだけは整然と立っている。恐らく、硝子を引っ掻くような音の根源は彼だろう。彼は剣をダラリと下げ、胸に手を当てると晴れやかな表情で歌いだした。

『英雄の記憶無くせしは 先の世より出でし傑物なり 清き少女と見つけしは 起これり奇跡の始めなる』

ぐああ！？ と、マニニューラ達が断末魔をあげ始める。澄んだ高音^{ソラ}をあげるヒヨウサの周りに、魔方阵が形を成していく。

『果てなき放浪の果てに かつての朋と出会いけり されどその者既に悪しき者なり 英雄の心 朋に傾きて共に歩くるをきみける』

魔方阵は、原子核の周りを踊りまわる電子のように彼を覆い尽くす。マニニューラ達の体の周りにも、魔方阵が描かれ始めた。ヒヨウサの声は、だんだん威圧感を増していく。

『少女と英雄 悪しき者に伴ひて この世の望へ挑みけり 少女と

共に 戦ひて 勝利の果ては 消滅なり』

ヒョウサの声は、辺り一帯に響いた。環境に影響はしない。魔方阵が、直接脳に作用する書式のものだからだ。

『少女の悲しみ 天上の神に届くなり 神その願いを叶へし時 英雄の魂蘇へる』

ヒョウサの歌が最高潮に達し、マニョーラ達はそれぞれ地面に突っ伏した。

自然への影響が一切懸念されない歌。その歌の名前は、『記憶』

D i s s o n a n c e : 5 あの日、記憶は鮮やかに蘇えり（後書き）

ヒヨウサ

「遅い。それに今日って更新予定日じゃ……」

うん。更新予定日じゃないw

エレナ

「何してんのよ」

本来の更新予定日に更新できてなかったから……うん、なんかスマソ

ヒヨウサ

「10万ボルト」

エレナ

「冷凍ビーム」

ぎゃああ!?

—— 数分後

えー、今回ヒヨウサが歌った『記憶』という歌ですが、歌詞はポケダンの主人公をモチーフにしています。

あと、作者は古典の勉強をサボりがちなんで、助動詞とか活用に少しおかしい点があると思います； 気付いたら指摘お願いします。

D i s s o n a n c e : 6 カゴの実の番人（前書き）

『強い光 私の心も 打ち抜くの 激しい恋情が 身を焦がす』

Dissonance : 6 カゴの実の番人

ニユーラは突っ伏したまま動かない。ヒヨウサは隙を見て立ち去ろうとした。だが、その時

「ま、待て……」

と、弱々しい声が後ろからかかった。振り返ると、マニユーラが腕を伸ばして立とうとしていた。

「……」

ゾクリ、とヒヨウサの鳥肌が泡立った。喉を、唾が滑り落ちていく。無意識に、右手が剣の柄へ伸びる。だが、マニユーラは動く気力はあるものの、立ち上がる力は残されていないようだ。それを見たヒヨウサは心なしか安堵のため息を吐いた。

「お前は……我々の縄張りに、入りこんで……侵そうとした……このまま行かせる……ものか……」

更に、剣の柄から手を放した。この様子だと、話が通じそうだ。

もつとも、脳に影響を与えたので声が聞こえているか不安だが、とりあえず切り出した。

「僕は、貴方達に危害を加えに来たんじゃないよ」

その瞬間、マニユーラの手が動きを止めた。

「何……?」

マニユーラが驚愕を顔に表しているのを見ると、声は聞こえているようだ。ヒヨウサは、マニユーラを刺激しないよう、静かな口調で、表情の変化も最小限に抑えて言った。

「僕の友達が、醒めない夢に捉われた。だからこの樹海の奥地にあるカゴの実が必要なんだ」

「……」

マニユーラは頬をピクリとも動かさず、ヒヨウサの話に聞き入っている。

「僕が木を切りつけていたのは、戻る時の目印にするつもりだった

んだ。貴方達の領土をどうしようなんて言つつもりはない」

「……本当かどうか、信じかねるな」

マニニューラは、できるだけ威圧的に言っただつもりだが、頭に無限の痛みを刻みつけられて地面に這いつくばっている状態では、それも無理があつた。ヒヨウサが、更に威圧的な態度になる。

「僕のことを疑つて、最後の力を以つてかかつてきてても良いんだよ？」

そう言つて、また腰の剣の柄に手をかけた。マニニューラは、信じるのが得策、いや、唯一の選択肢と考えたのだらう。

「チツ……しょうがない……お前のことを信じてやろう……。……だが、用が済んだら、さつさと……立ち去れ……」

マニニューラはそれ以上顔をあげるのが苦しかったのか、単に力尽きただけなのか、頭を落とした。動かないマニニューラとニューラ達を見て、ヒヨウサは悲しげな顔をして、去つていった。

「もうすぐ奥地かな……」

樹海に入つて、丸1日が経つた。

空を覆う木々は段々その数を増していき、時間帯は昼間なのにドンカラスの羽が辺り一面に舞っているかのごとく暗い。故に、周りに食材になりそうな植物は少なく、空腹で倒れる危険性をヒヨウサは心配した。

——ひよつとしたらこのまま飢え死にしちゃうんじゃない……

ヒヨウサが一抹の不安を覚えたその瞬間だつた。視界が、突然に広くなつた。

眼前には、ハブネークが何匹も繋がつてようやく1周出来そうな樹と、その周りで実を膨らませている群青色の果実を成らした小さな植え込み。目の前の樹以外にその天上を遮るものはなく、太陽の光が、長時間暗がりの中にいたヒヨウサに眩しく感じられた。

「あれが、カゴの実……」

ヒョウサはガルバから貰った紙を取り出す。そこには、群青色の果実と全く同じ形模様をした木の実が描かれていた。言うまでも無く、カゴの実である。ヒョウサはカゴの実を採ろうと、駆けだした。彼を見つめている強大な力の存在に気付かずに。

「よかった、見つかったよ」

ヒョウサが植え込みに手を伸ばしてカゴの実の1つをもぎ取ろうとした瞬間、彼は違和感を感じた。

——この植え込み……何で誰も見張っていないの？

番人がいるような場所に生える植物の実だ。見張り役となるポケモンが1匹はいてもおかしくないだろう。だが、辺りには誰もいない。不法に近づいた場合、番人が即座に来る、ということだ。

ヒョウサは、殺気を感じて即座に飛び退いた。数瞬前に彼がいた場所を、深緑の刃が撫でる。

「誰だっ！」

彼は反射的に剣を抜いて身構えた。その視線の先にいるのは、1匹のポケモン。緑のスマートな体に、知的な瞳。ビリジオンという種族だった。

「私はドロレス。この樹海の番人よ」

ヒョウサの質問に答え、ドロレスと名乗ったビリジオンは、その瞳をヒョウサに向けた。

「貴方かしら？ 私の部下からの報告にあつた侵入者というのは」
ゾツと、ヒョウサは背筋に刃を入られたような寒気を覚えた。
部下、というのはマニユーラだろうか？ だとしたら、彼女の怒りを買ってしまったことになる。

——いや、マニユーラ達の誤解は解いておいた筈……でも、和解した、と見せかけて実はこのビリジオンに頼ろうとしていたんじゃない……。

ヒョウサは、思考の渦に巻き込まれそうになりながら、剣の柄に手をかけ、言葉を絞り出す。

「ち、違うよ……僕はただ、カゴの実が必要なだけで……」

「疑いをかけられた瞬間弁明しようとするあたり、どうも怪しいわね。それに、居合の体勢をとっているところも」

取り繕った瞬間にかけられたドロレスの妖艶な声で、ヒョウサは喉を詰まらせた。剣に手をかけた以上、どんな言いわけも無力だ。相手に凶器を使うと示唆しまったのだ。

「この森は、私の友達よ。それを汚すなら、貴方を殺してでも守り抜く」

ヒョウサの喉を、冷たい唾が滑り落ちていく。始めて、ここに来るべきではなかったという後悔が鎌首をもたげた。そのまま、背中を向けて逃げ出したいという思いも。

——でも、引き下がれないよな……。

このままだと、エレナは眠ったままだ。彼女を起こすには、ヒョウサという、眠り姫の呪いを解く王子がいなければならない。

「……カゴの実を渡してくれないか。それさえあれば僕は何も要らない。この森からすぐ出ていくよ」

「疑わしいわね。今まで、幾多のポケモンがここに來たのよ？ こ

こは土地も肥えてて、農業に適しているからね」

必至の訴えに刺さるドロレスの冷淡な声。

「……」

ヒョウサは、粘り強くもないし、あんなに疑い深いポケモンを説得する術も持ち合わせていない。ここまで言われたら、力に訴えるしかない。

覚悟を決めて、ヒョウサは柄に手をかけた。

> i27800 — 1837 <

「……10万ボルト！」

刹那に襲いかかったのは、閃く銀の断頭の刃ではなく、金の稲妻の槍だった。

ドロレスが飛び退り、10万ボルトは空を貫く。

「不意打ちね。そんなものに私が騙されると思ったのかしら？
…ハアツ？」

ドロレスが念じた瞬間、彼女の頭上に大きな光の刀が形成された。
ドロレスが頭を振ると、その刀はヒヨウサめがけて落ちてきた？

「……聖なる劔！」

——間に合わない？

そう思ったヒヨウサは、剣で受け止めようとせず、尻尾を固く
して刀と斬り結んだ。アイアンテールという技の応用である。

ガキン！

光の刀はアイアンテールとぶつかって、間もなく粒子となって消
えた。ヒヨウサはすぐ次の行動に移った。

『世界救ひし英雄の 再び愛しき少女と 出会ふる時 少女の泪流
しけるは 滝の如く限り無し』

昨日歌った歌の2番の歌詞である。3個の魔方陣が、ヒヨウサを
中心に回っている。

『高き山に登りて 感謝といふもの学び そこで見える景色に息を
のみけり 凍てつく地を駆け抜け かつての栄光を戻しけり』

ドロレスの表情には何ら変化が無い。ヒヨウサは、歌いながら更
に10万ボルトを魔方陣に打った。

魔方陣は電撃を受けて壊れるかと思いきや、ヒヨウサの電撃を受
けたのか金色に変化し、更に電気を帯びたようにバチバチと唸っ
ている。

「そんなものに負けるわけないでしょう。聖なる劔！」

ドロレスは嘲笑うと、また聖なる劔を作りだした。今度は3本。
「僕も負けないよ！」

ヒヨウサが指示を出すと魔方陣はドロレスの所へ飛んでいった。

それらは全て聖なる劔とぶつかりあい、互いに消滅した。が――

「ねえ、何で僕が魔方阵に電撃を浴びせたのか、分かる？」

「……？」

ヒヨウサは、いやに強気な態度をとる。その様子にドロレスは困惑したが、威圧感が崩れないように、顔には出さないようにした。

「電気つて、^{プラス}、そして^{マイナス}があるんだよね。で、この2つは引かれ合う。だから――！」

ドロレスがヒヨウサの言葉の真意を理解し、目を見開いた瞬間、魔方阵の粒子が壊れた絆を繋ぎ合わせるようにひと塊りに集まり、魔方阵を構成した？ 魔方阵に描かれていた音符が飛び出して宙を舞い、ドロレスを包囲する。そして――

魔方阵3つが、轟音をたてながらドロレスに炸裂した？

D i s s o n a n c e : 7 魔法（前書き）

『 かつての勇者は 勇猛果敢 暫時休憩をにおいては また駆けだし
て 皆彼を慕っていた 』

Dissonance: 7 魔法

ヒヨウサの10万ボルトを受けた魔方陣が、その影響通り、雷光の勢いでドロレスに激突した。
勝った。

この単語が、ヒヨウサの頭を占領した。だが、伝説とも言われるブリジオンを倒すには、ヒヨウサの攻撃は遠く及ばなかった。

「甘いわね……そんな攻撃で私に打ち勝てるとも思ったの？」

煙が晴れ、ドロレスの姿が露わになったとき、ヒヨウサは改めて息を飲んだ。

魔方陣の破片らしき黄金色の粒子が辺りを漂いながら大気に溶けていく。その粒子の原点には、青い半透明の球状のバリアで覆われたドロレスの姿が。バリア、という文字通り、彼女の体には傷1つ見られない。

「防御術、解除」

ドロレスが言った瞬間、バリアは一瞬にして弾け飛んだ。

——魔法、みたいなものなのかな？

そう思いつつ、ヒヨウサは喉に手を当てる。歌う準備である。

「聖なる剣！」

ドロレスの頭上で、光の剣が形成されていく。ヒヨウサは、それが見えた瞬間に歌い始めた。

『嗚呼神よ この痛みを どうすれば消せるのですか 貴方が望むままに 私の苦しみを 操ると云うならば この世界は 闇に孕ちる』

ヒヨウサの頭上に、魔方陣が形成されていく。

『貴方がそれを望むなら 貴方がこの世に 降臨された意味は ど

ここにあるのでしょうか——っは？」

途中で歌を区切り、魔方陣の中心に電撃を撃ち込んだ。電撃は、魔方陣の中心で眩く光ったと思うと、たちまち、魔方陣を柄とする電撃による巨大な剣と化した。

瞬間、ドロレスの聖なる剣が上から襲って来た。歌わなければ攻撃できないので、どうしても先制攻撃はできないのは否めない。だが、それを言いわけにしないヒヨウサである。

「よっ！」

後ろに跳んで、剣を回避する。尻尾で斬撃が空を駆け抜けたのを感じた。それに臆することも無く、ヒヨウサは剣を掴まずに、空中で操作して横薙ぎに振るった。だが、ドロレスによるもう1つの剣、リーフブレードが彼女の足首から伸びて、違うことなく電撃剣を受け止める。

「へえ、なかなか業物の剣ねえ。でも、貴方が振るうにはデカブツ過ぎるんじゃないかしら？」

ドロレスの舐めまわすような視線がヒヨウサの鳥肌をくすぐる。

「ちよつと、どれくらい耐えることができるか試してあげる」

彼女は妖艶な笑みを作った瞬間、左前足で地面を軽く叩いた。その瞬間、魔法、とヒヨウサが感じたものを使ったのだろっ。地面に無数に敷かれていた蔦の数々が一斉に天を突き刺した。合わせて、ヒヨウサが電撃剣を天に向ける。

「雷！」

瞬間、ヒヨウサが使ったのは電撃剣ではなく、ポケモンの技だった。より高い突起物に突きささる習性を持つ電子の動きは、空から墮天使のように落ちてきて、電撃剣に突き刺さった。

「何がしたいの？」

ドロレスは言った瞬間、気付いた。雷が突き刺さる条件は、より高い突起物である他に、直接的に、もしくは間接的に接地していること。電撃剣は、宙に浮いていて、ヒヨウサはそれを掴んでいない。

何故だ——そう思った瞬間、ドロレスは、電撃剣の魔方陣の柄からさらに幾つもの魔方陣が伸びて、無数にある鳶をしつかり掴んでいる。

「しまった……？」

ヒヨウサは攻撃を仕掛けることなく、鳶は黒焦げの有機物と化した。ドロレスの草タイプの魔法はもう通じない。

「電光石火！」

ヒヨウサはピストルから放たれた弾丸のように飛び出すと、一直線にドロレスの元へ飛び出した。

「丸腰で立ち向かうなんて、馬鹿にも程があるわよ」

ドロレスはその場から飛び退ると、リーフブレードで切りつけようとした。だが、ヒヨウサの拳から、それくらいの大きさの電気の珠が放たれた。ドロレスは舌打ち混じりにそれを弾いた。その瞬間、感じたのは空気が乾燥する感覚と、自分に向けられた大きな殺気。

——電撃剣！

音とフィーリングからそれを感知して、殺気の方に向き直る。自分の予想が合っていることを確認すると、右前脚で円を描いた。円の中から、光の粒が幾つも飛び出てくる。光の珠は、その外郭を剥がし取り、石ころの正体を現した。ストーンエッジ、という岩タイプの大技である。

「ばれたか……」

ヒヨウサは電撃剣を操りながら、失策を悟る。そのスピードは、ストーンエッジに遮られ、ドロレスに斬撃を喰らわせるには至らなかった。

「なかなか耐えるわね……上空から攻撃したらどうなるのかしら？」

「？」

聞こえた瞬間、ヒヨウサは電撃剣を伏せ、反射的に歌いだした。

『貴方が僕の傍にいて 優しく励ましてくれる時 世界は優しさの光に満ちて 僕もきつと 空も飛べるのだらう』

数秒の間に、彼の背中に羽が構築されていく。ドロレスも、魔法と呼ばれるものを使っているらしく、彼女の背中に翼が対になっている。

「着いて来なさい」

ドロレスが、翼を華麗にはためかせて飛翔する。ヒョウサも、それに続く、だが、慣れてないのか、動きは少しぎこちない。

「10万ボルト！」

ヒョウサは不意打ち気味に技を放った。だが、ドロレスはバリアを出してそれを防いだ。10万ボルトは、バリアを撃ち抜くと、空の彼方へ飛んでいった。

「制御しきれてないんじゃない？」

ドロレスが口調に嘲笑を混ぜながら言う。ヒョウサは、それに屈辱を感じながらも、反弁はしない。

「そろそろ仕留めてあげる。リーフブレード」

ドロレスの細い首の付け根から鮮やかな翠の閃光が長く伸びる。

「させるかっ……」

ヒョウサはそれをかわすべく、リーフブレードが襲いかからないうちに急上昇する。彼は、少し電光石火の要領を加えていたので、加速し、斬撃を受けずに済んだ。

斬？

メリメリッ？

遙か後方の樹海に、彼女の技は届いていたらしく、木が斬り倒される轟音が轟いて来た。

「スパーク！」

それに臆することなく、ヒョウサは高圧の電気を帯びて、翼をはためかせて突進する。ドロレスの前に、ドーム状の蔓が筈のように編まれる。

グリーン・キルキラ
「緑式殺攘！」

それに対し、ヒョウサは豪速で突進しながら伏せていた電撃剣を

呼び醒ます。電撃剣は、彼の意志に従い動きだした。バチバチバチッ！ という音が空を切る音と共に、逆袈裟でドロレスに斬りかかる。

だが、それは彼女の展開する緑式殺攘に触れた瞬間、シャーン、と音をたてて粒子となつて風に吹かれて消えた。

「なっ！？」

ヒヨウサは戸惑いながらも、その加速を止められない！ 緑式殺攘に、思いっきりぶつかった。刹那、彼のスパークも、歌の翼も、完全に消え去った。翼が消えた、ということを理解した時には、ヒヨウサは地面に叩きつけられていた。肺から息が締め出される。

息を切らしながらよろよろ立ち上がったヒヨウサに、上空から声がかかる。

「教えてあげるわ。今はグリーン・キルキラ緑式殺攘触れた瞬間に『音魂』もポケモンの技も消し去るっていう魔法なの」

「魔法つて……じゃあ、あの青い球体も……」

「そうよ。私は魔女なの。もっとも、草・格闘タイプだからその類の魔法しか使えないけど」

——落ち着け。魔法、といつても、普通の技と変わらないじゃないか。

ヒヨウサが自身を落ち着かせるように心の中で念じた瞬間、激しい目眩に襲われた。さっき地面にぶつかった時の衝撃だろう。

「じゃあ、ここらで終わらせてあげる。侵入者」

ドロレスの冷酷な瞳が、彼の恐怖を射る。天空からの必殺の打撃に備えて、ヒヨウサはいつでも10万ボルトを放てるように身構えた。だが、最後の攻撃はいつまで経っても放たれることはない。やがて、ドロレスが地上に降りてきた。

「？」

何をしているのだろう、とヒヨウサが構えを解くと、続けて上空からもう1匹ポケモンが降りてきた。光沢のある体に、機械的な目大きく伸ばした透明な翅を持つその正体は、メガヤンマというポケ

モンだった。

「ドロレス様、大変なことになりました」

メガヤンマは、焦りが容易に窺える口調で早口に言う。ドロレスの顔が、不機嫌の色を醸し出す。

「何かしら？ 早く言つて。私はこの侵入者を早く始末しないといけないんだから」

「侵入者？ この者が、ですか？」

メガヤンマは、ヒヨウサを見ると不可解極まりない、という表情で言い返した。ドロレスは、話の辻褄が合っていないことに早くも気付きだした。

「違うの？」

「違います。報告にあつた侵入者は、オノノクスという種族で、現在、最終部隊と衝突中と申し上げたではありませんか。この者は、ただカゴの実が必要でここに来ただけ、とマニニューラが報告しております」

—— やつぱり、マニニューラはあのポケモンの手下だったのか。

ヒヨウサの顔に陰りがよぎったが、マニニューラが約束を破った、というわけではないので、彼を言及しようとは微塵も思わなかった。そんなヒヨウサの横に、何かがドサツという音を立てて落ちてきた。

「ドロレス様…… 申し訳…… 御座いません」

落ちてきたのは、フシギソウという種族のポケモンだった。緑色の四足歩行で、背中に開花寸前の蕾を抱えた彼は、全身傷だらけで痛々しい有様だった。

「奴が…… 来ます」

フシギソウが呟いた瞬間、群青色の弾丸がメガヤンマを弾いた。

「ぐはあ？」

ヒヨウサと変わらない大きさの珠に弾かれたメガヤンマは、草原中央の巨木にぶち当たって地面に落ちた。

「や、奴って……」

ヒヨウサは、あまりの覚悟に身震いする。

「ゴメンね。侵入者は別の奴だったみたい。勘違いしちゃったわ。お詫びに、カゴの実を持たせて逃がしといてあげる。侵入者と戦わないで済むだけでも儲けものよ？」

樹海のピンチである。

ヒヨウサは勘からそう思った。なのに、樹海の主であろうドロレスは、慌てるどころか妖艶な目でヒヨウサを逃がそうとしている。

「……」

だが、ヒヨウサはそこに一抹の苦悩が燈るのを見た。恩を売っておくためだ、とかカゴの実を貰える御礼だ、とか、そういうことではない。ただ本能的に、ヒヨウサはドロレスが見つめる方向に、凍てつく視線を投げかけていた。

「うっん。僕も戦うよ」

耳を劈くような轟音と共に、樹海を荒らすオノノクスというポケモンが姿を現したのはその数秒後だった。

Dissonance: 7 魔法（後書き）

今回、鳶を焦がすところの描写では、電気の性質を利用しました。しかし、空中にいるドロレスを電気で打ちぬく描写では、電気の性質は無視してあります。

そうでないと話を書けなくなるもんで……。この作品で私が書く電気の概念は、“より高い接地している突起物に当たりやすく、空中にいる相手を容易に打ち抜ける”ものと考えて下されば幸いです。私の書く電気全てがそうであるとは限らないのですがw

D i s s o n a n c e : 8 拘束破りの籠（前書き）

『ヒラリと舞い散る 貴方の影を 桜が舞う 月灯りが照らす 出
会えた嬉しさ』

Dissonance : 8 拘束破りの龍

「っ、冷凍ビーム！」

ヒヨウサが放ったその技に、ドロレスは驚愕の表情を見せた。ピカチュウという種族は、本来冷凍ビームなど覚えない筈。思わず横を見ると、ヒヨウサは魔方阵を作りだしていた。奇妙な模様と古代アンノーン文字が描かれた円陣列の中心から放たれた、青白い光線が、オノノクスに突き刺さる。

「んがはっ……龍の波動！」

苦手技を受けたオノノクスは、しかし屈することなく、空碧色の波動で対抗した。

「聖なる劔！」

ドロレスが、劔で波動を切り裂く。直後、リーフブレードが伸びてオノノクスを切り裂かんと襲いかかった。

「ドラゴンクローオオオッ！」

だが、オノノクスがドラゴンクローでリーフブレードを受け止めた。深緑と群青の刃は火花をたててぶつかり合う！

「ヒヨウサ、応援頼むわよっ……」

ドロレスが目だけをヒヨウサに向けて頼む。ヒヨウサは小さく頷くと、周囲の環境に影響を与えないようボソボソと歌いだした。

『燃え 煉獄の猛火 破壊の邪神よ』

構成された魔方阵は、真ん中に幾何学的な模様を湛え、その周囲にアンノーン文字で“DAIMONJI”と記されていた。その名の通り、中心が淡く光ると“大文字”と呼ばれる五対の炎が伸びた。ドロレスはその場から飛び退り、その大文字を妨げるものは、何一つなかった。

「あまい！ 岩石封じ！」

オノノクスが拳で地面を殴りつけると、大文字の下から岩が突き出て大文字を打ち消した。オノノクスは、そこから岩を打ち砕くと、

ヒョウサに碧い波動を放った。

「龍の波動！」

ヒョウサは、何も言わずにそれを飛んで避けた。だが、着地する瞬間に石に躓いてしまったらしく、地面をゴロゴロと転がった。

「ヒョウサ！」

ドロレスが声を張り上げたが、時すでに遅し。オノノクスは、既にヒョウサの元に走り寄り、ドラゴンクローを振り降ろそうとしていた。

「危ない……っ」

今からリーフブレードを振るっても、オノノクスがドラゴンクローを振り下ろす方が早いだろう。

「しっかりしろ、ヒョウサ！」

ドロレスが叫んだ瞬間、オノノクスがその右手を振りおろした！

「っ……」

直後のグロテスクな光景を予想して目を瞑ろうとしたドロレスは、直後にその必要がないことに気付いた。ヒョウサは、剣を抜いてオノノクスのドラゴンクローを受け止めていた。

「甘いのはそっちだよ……スパーク！」

ヒョウサが、体から高圧の電流を発する。直接ヒョウサと接触していたオノノクスは、相性は悪かれ、ダメージは大きかったようだ。「更にっ！ アイアンテール！」

ヒョウサの鋼の尾がオノノクスのわき腹にクリーンヒットした。

オノノクスは、「ぐほっ」という奇妙な断末魔をあげた。

「ナイスよ、ヒョウサ！ 聖なる劔！」

ドロレスの光の劔が猛威を振るった。しかし、オノノクスは強靱な脚力で飛び上がり、紙一重でかわしてしまった。

「甘いんだよ。雷！」

しかし、オノノクスが着地した瞬間にヒョウサの電撃が炸裂する。着地直後で、バランスも安定しないオノノクスに、それを避けるのは至難の技——否、不可能だった。オノノクスの体はダメージ

を受け、硬直した。

「（よっしゃ、これで歌う時間を稼げる！！）」

ヒヨウサは、胸に手を当て、神に祈るように目を閉じた。

「更にっ！」

そこへ、ドロレスが追い打ちをかけた。彼女が口の中で何やらブツブツと呪文を詠唱しはじめたとき、その追い打ちは姿を見せた。地面から伸び出てオノノクスの五体満足のあちこちに絡まる鳶。その力は強力だ。

「あ、有難う、ドロレス。行くぞ！」

ヒヨウサがドロレスに礼を言つて歌おうとした瞬間、しかし地面が大きく揺れ出した。俗に言われる“地震”という技だ。

「な、何、よ、コレ……！？」

隣でドロレスが目を丸くしている。それを見ると、彼女が起こした技ではないのだろう。ヒヨウサはそんな技など覚えていない。寧ろピカチュウ族が覚える技ではない。魔方阵で繰り出すにも、十分に歌っていない状況。つまり、この技を繰り出しているのは……

「オノノクス！？ そんな、馬鹿な……」

しかし、地震を出しているのは実際にオノノクスだ。とすると、彼はドロレスの魔法の鳶によって強く強く拘束されながら地震という大技を繰り出しているということだ。

「う、あああっ！！」

揺れに耐えきれず、ヒヨウサは倒れ込んでしまった。しかし、危険が襲ってくることは無く地震は止んだ。

——地震は出せても、そこから追撃は出来なかったかな。

起き上りながら、そうヒヨウサが高をくくっていたら、横からドロレスの金切り声が耳をつんざいた。

「ヒヨウサ、避ける！」

「え？」

その顔は、原色が緑でありながら青く染まり、彼に危険が迫っているのに、ヒヨウサ自身が邪魔をして彼女が助けてやれないと言っ

ているように見えた。

「何が――」

瞬間、彼の意識はかき乱され、体は芥のように宙を舞った。気合いパンチ。ある程度力を溜めてから最大級の一撃を見舞う格闘タイプの大技。

「何てやつなの。薫で縛りつけて、まだ動けるなんて……！」

ドロレスは、薫が自分の勝利条件だったのか激しく歯を軋ませた。今まで、薫で縛ってきたポケモンを数多屠ってきた彼女にしてみれば、当然の反応かもしれない。切り札が効かないとすれば、眠りか麻痺か氷で動きを更に縛ろうか。しかし、眠らせたり凍らせたりする技はドロレスは持ち合わせていない。ヒヨウサが電磁波を覚えていたとて、彼を起こして技を出させるだけの時間は残っていない気がする――

「……？」

そう、思ったところでドロレスはオノノクスの動きに違和感を感じた。薫で拘束して、確かに素早さは下がった。だが、今はそれを更に下げられているようだ。

「……静電気ね」

ピカチュウ族の特性。触れた相手を麻痺させるというもの。なるほど、オノノクスは気合いパンチでヒヨウサを吹っ飛ばした際にそれに引っかかってしまったようだ。

「向こうで倒れているネズミにも、役に立つ術はあったのね」

ドロレスは吐き捨てるように言うと、聖なる剣を生成した。そして、オノノクス目がけて振り下ろし。

「……うーん……」

ヒヨウサは、爽やかな草の香りで目を覚ました。

「ドロレス様。目を覚まされたようです」

彼の顔を覗き込んだらしいチコリータがドロレスに言った。右足

に包帯を巻かれているのはオノノクスにやられたのだろうか。

「あ、そうだよ。オノノクスはどうしたの!？」

ヒヨウサがガバっと起き上って叫んだ。この様子だと、ドロレスはすました顔で座っていそう。そうであつたら、オノノクスは無事に追い払われただろうが、せめてどうなつたかは聞きたい。

「あら、起きたのね。大丈夫よ。あの暴漢はさつさと森から追いやつたわ」

ドロレスは、案の定ヒヨウサの予想通りに答えた。更に、彼が気合いパンチで飛ばされてから何があつたのか、緻密に（とはいえ僅か数10秒間だが）ヒヨウサに教えた。

「ごめんなさいね。侵入者とか言っていきなり襲いかかつて」

「うーん、僕が勝手に君達の領分に入ってきたのもあるから、ああいこつてことじゃない？」

ヒヨウサは苦笑いしながら自嘲気味に言った。ドロレスはつれない顔で「素直じゃないわねえ」とだけ返した。因みに、その後

「用は済んだでしょ。さつさとカゴの実持って帰りなさい」

と煙たそうに追いやられたのはここだけの話だ。彼女は少し無気力的な性格なのかもしれない。

D i s s o n a n c e : 8 拘束破りの龍（後書き）

今月初の更新は既に25日の時点ですって言うねw

ヒヨウサ

「懲罰。と、言いたいけど言いわけを許すよ。何かあった？」

いや、夏季補習。合宿。課題。

ヒヨウサ

「他には？」

それだけ。

ヒヨウサ

「凄いな……まあ頑張ったら？」

言うことはそれだけかいっ！？

D i s s o n a n c e : 9 W a k e u p ! (前書き)

私たちの願いはいつか この星空で 希望の光に満ちた 銀河とな
つてくれるだろうか それが叶うのならば 本望だ

Dissonance: 9 Wake up!

「ヒヨウサ、どうしてるかなー」

クリストが暇そうに呟いた。兄のガルバは暇をもてあまし過ぎて遂に気力が果てたのか、声を発しようとしてもしない。ダイニングテーブルに突っ伏している。

ヒヨウサの家の中。2匹の兄妹は深い眠りにつかされたエレナの看病をしていた。だが、看病とはいっても、エレナの身に何ら異変が起こるわけでもない。なので、彼女の容態を確認すること以外全くすることがない。この際言わせてもらおう。暇だ。暇すぎる。

できることなら、ヒヨウサの家をさっさと立ち去って帰りたいのだが、エレナを1匹にしておくのも気が引ける。ガルバ達の家はヒヨウサの家からなかなか遠い距離にあるので、エレナを運んで連れていく気もない。

あーあ、こうなるんだったら看病役なんて引き受けるんじゃないかな。寧ろ俺が樹海に進撃してカゴの実を奪ってくりや楽だったかもな……

実は樹海の番人が伝説のポケモンで、彼女と遭遇したヒヨウサが激闘したとは知らずに勝手に物思いにふけるガルバ。そこへ、声変わり前の少年の声が響いてきた。

「エレナ！ カゴの実持って来たよ！」

ガルバとクリストがそちらに視線をやると、右手に青紫のカゴの実を持ち、肩で荒々しく息をしながら全身に傷を描いているヒヨウサと目が合った。因みに、その光景を見た瞬間にガルバは先の妄想を取り消した。

「わぁー、ヒヨウサお帰りなさいー」

クリストが嬉しそうに笑いかけた。まるで欲しかった玩具を与えてもらった子供のように。

「おう、頑張ったな。じゃあ、それ貸せ」

「えっ……」

ガルバが差し出せと言わんばかりに手を差し出す対象は無論、ヒヨウサが必至になつて獲得したカゴの実。藪から棒にそんなことを言われたヒヨウサはあまりまともな反応を返せない。そんなヒヨウサの状態を察してか、察さずか、ガルバは続けた。

「だから、カゴの実を眠気ざまし用に調理するんだつて。そのままじゃ殻が硬すぎてエレナに食わせるのは無理だから」

「え？ ガルバって木の実の調合とかできるの？」

「馬鹿にすんな。それでも、都で薬草の勉強をしたことはあるから怪しいことこの上ない。と、いうより即席で適当についた嘘だと分かる。何せガルバは14歳であるヒヨウサと2歳しか年齢が違わないのだから。」

つていうか、薬草とカゴの実は全く別物だよね……？

ヒヨウサがそんなことを考えている内に、クリストが目の前に顔を出した。

「ああ、ただいまクリスト」

「お帰りなさい。ムギユ」

クリストはいきなりヒヨウサに抱きついてきた。別に、日常茶飯事……ではあり、彼女からすれば仁愛の情を表しているにすぎないのだが、自分より大きいポケモンに抱きつかれるというのは結構疲れるのである。それに、全身に小さいものの、傷を負った身だ。通常以上に負担がかかる。

「痛い。痛いよ、クリス……ゴギユ」

突如、ヒヨウサの喉から聞き慣れない音が流れ出た。どこかの骨に衝撃が走ったときに出そうなものだが、彼女の意識の範疇ではない。必至にもがくと、ようやく彼女の腕の中から抜け出せた。

「げほっ、はあ、はあ……」

「おい、お前ら馬鹿なことしてるんじゃない。できたぞ」

そう言つて、喘ぎ続けるヒヨウサにガルバが差し出したのは、すり鉢に入つたグチャグチャした何かだった。青紫色のため、そのの

原型がカゴの実だと判断がつくつかないか。彼が雑な性格であることがこれを鑑みることと読みとれる。

「これ、食べさせても大丈夫だね？ 一応確認とっておくけど、目覚まし効果が消えてるなんてことはないよね？」

ヒヨウサの言葉は、固いことで有名なカゴの実がここまでの変貌を遂げたことからのものだった。寧ろ、どのような力を加えればこうなるのだろう。

そんな疑問が頭の中で渦巻いていたが、食べさせずに放っておくわけにもいかず、とりあえず食器棚の中からスプーンを取り出して一山すくってエレナの口の中に入れ、水で流し込んだ。途中で肺に入るのではなからうか、と心配だったが、とり越し苦労も無く、彼女の胃袋にカゴの実のなれの果ては収まった。

「ん……」

ピクリ、とエレナの瞼が動く。

「うわぁ、動いた。エレナ姉ちゃん、起きたんじゃない？」

クリストが目キラキラと輝かせて見つめる。それがさながら二山目の催促に見えたヒヨウサは、さらにすくって彼女の口に水と共に押しこんだ。

「ふぁぁ……え？」

そして、瞼に覆われていたアクアマリン色の瞳が現れる。

「エレナ！ よかった……」

ヒヨウサは、嬉しさのあまり相手が異性であることも忘れて抱きついた。それによる衝動を受けたエレナは暫し呆けていたが、状況を理解し、更にガルバとクリストに見つめられていることに気付くと水色だった顔を紅色に染め上げる。

「ちよつと、ヒヨウサ！？ 何抱きついてるのよアンタ！ ガルバも笑って見てないでなんとかしなさいっ！」

「ご、ごめん……でも、エレナがもう一回目を覚ましてくれるなんて思わなかったし……」

ヒヨウサが自分のしたことを思い返し、照れ臭そうに弁解するの

を聞いて、エレナはある1フレーズに違和感を覚えた。

「もう一度目を覚ます？」

「ああ。ヒヨウサの『音魂』とロゼリアの草笛を応用した『音魂』で二重に眠らされたお前は、簡単には起きない状態にあったんだよ」そして、ヒヨウサとガルバで今までの経緯を話した。エレナはクリストをあやしなから話を聞いていたが、ヒヨウサの樹海での健闘を聞き終えると、彼の全身に細かに走る傷に目をやった。

——簡単に謝るわけにもいかないのよね。

彼女が眠らされる一連の出来事は、ヒヨウサのミスによって起こったことだ。彼がカゴの実を求めて樹海まで行って、伝説のポケモンと互角の勝負をしたことは評価に値するが、言い換えれば彼が自分で起こした問題を自分で解決しただけだ。よって、次の行動をどうするか。彼女は葛藤の狭間に身を置かれた。だが、素直に謝るのも照れが出る。結局、何も言わないままにベッドを下りた。その時の彼女の顔が赤く染まっていたのはまた別のお話。

「ところで、ヒヨウサにエレナ、ちょっと訊いて良いか？」

「何かしら」

「どうしたの？」

ここで、それまで疑問に思っていたことをガルバは口にしようと切りだした。その声に、2匹が振り向く。

「ローズ、というやつだったな。何でヒヨウサに戦いを挑んだんだ？」

的確な問。だが、それに答えられずにヒヨウサは首を捻る。ガルバはエレナに視線を移した。彼女はそれに気付いたが、首をかしげただけだった。

「えゝ分かんないのゝ」

クリストがつまらなさそうに頬を膨らませる。尤も、会話の主旨をあまり考慮にいれていないのだが。

「……何だ？ 黙ってるってローズってやつがただの愉快犯みたいじゃないか」

「いや、みたい、じゃなくて多分そうかと……」

ヒヨウサは答えながら、苦笑による顔の引き攣りを作った。エレナが答に詰まって、ヒヨウサと同意見であることを示すように彼を流し見た。

「お前、愉快犯相手にまともに戦ったのかよ。目的も不明なら相手にしないで逃げろよ」

「で、でもさ……この状況になると戦わざるを得ないんじゃない……」

ドサリ。そんな音がして、貨物船の積み荷の袋が波止場に無造作に投げ捨てられるかのように、ヒヨウサは床の上に寝そべった。

いや、正確には寝そべったのではない、疲弊とダメージの蓄積により、倒れたのだ。

「ヒヨウサ……ヒヨウサ!? 何があつたのよ、しっかりしなさい！」

エレナは動かなくなった少年を必至に揺り動かす。クリストが彼の顔を見て、泣きそうに顔を歪めた。

「落ち着け。呼吸も脈も正常だ。即座に病院に運ぶぞ」

ガルバはヒヨウサを抱えると、大腿で家を飛び出した。その足元を、心配そうにヒヨウサを見上げるクリストが離れずについて歩く。エレナは、俯いたまま下唇を噛みしめ、震えていた。さながら零れおちそうな涙を我慢しているようだったが、やがて顔をキツと上げ、鍵をかけてガルバ達の後を追った。

「馬鹿……本当に、馬鹿!! 人の心配なんか棚ポケモンに上げて、自分だけ傷ついて……!!」

その言葉が翻って自分に突き刺さる。そのことに、嫌悪を覚えながら病院への道をひた走る。

D i s s o n a n c e : 9 W a k e u p ! (後書き)

ヒヨウサ

「ああ、更新遅れたね」

……うん。合宿と体育祭と考査に阻まれたのさ。ハハハ。

エレナ

「言い訳に変わりはないでしょうが。ちゃんとしなさい馬鹿」

ヒヨウサ

「そもそも、三行事に阻まれておきながら別の小説はきっちり更新しているんだよね」↑

D i s s o n a n c e : 1 0 平穩は帰ってきて（前書き）

『僕は 君の為に 歌うのではない 憎しみが 苦しみが 狂おしく
僕を燃やしつくす ねえ 僕が消える前に 消えてくれるかい
？』

木造建築の病院の二階。ヒョウサという名のピカチュウはとある病室のベッドに寝かされていた。医者の診断によれば、単なる疲労が原因で命には一切別状はないとのこと。それを聞いたエレナは安楽を覚えた。今は椅子に座って規則的に安らかな寝息をたてるヒョウサを見守っている。

「……その子は、助かったみたいね」

後ろから唐突に声がかけられた。どこかで聞いた覚えはあるけど、誰の声だろう？ 声の主を思い出せぬまま、後を振り向いた。

「ア、アンタは……！」

両手にそれぞれ赤と青の薔薇を携え、頭には三本の棘を生やして、しかし優雅さを思わせる容姿。ロゼリアというポケモン。

「オノノクスの馬鹿は失敗してくれたみたいね。私は手を出さずに見過ごしておくべきだったわ」

ロゼリア、即ちローズは忌まわしさを顔で表明していた。それは勿論のこと、エレナの平静を逆なでした。

「……どういうこと」

「知りたい？」

ローズの表情は打って変わって、相手を蹴るようなサディスティックなものになった。エレナは戦慄さえ覚えたが、敢えて強気な姿勢を維持したまま言葉を返した。

「話さない」

「じゃ、教えてあげる」

*

それは、数百年前のことだった。ある『音魂』使いのゲンガーが死去した。彼は些か有名な『音魂』使いであつたらしく、その死は

国中で噂になった。ゲンガーの二つ名は、『永遠の歌姫』

数日後、彼の死を追うようにゲンガーの恋人であつたユキメノコも他界した。彼女は『天使の恋人』と呼ばれていた。

ゲンガーが死去した丁度その日、ある村ではバルビートが生まれた。ユキメノコが死去したその日には、同じ村でイルミールゼが生まれた。同じ時期に生まれ、また互いに近しい種族であつたということもあつて、彼等は村中の誰よりも仲良くなつた。その内、バルビートは音楽の分野において才能を発揮し、誕生日に死去したゲンガーに倣つて『永遠の歌姫』という名前を得た。また、イルミールゼはユキメノコから『天使の恋人』という名を受け継いだ。そのように、『永遠の歌姫』と『天使の恋人』という名は幾代にも渡つて受け継がれてきた。そして、今は……。

*

「ヒョウサは、『永遠の歌姫』よ。だけどアタシは……」

「『天使の恋人』……じゃないの？ 先代の天使の恋人は八月九日に死んだわ。貴方の誕生日は？」

覚えていない。これが彼女の答だつた。彼女がまだイーブイだつた十二歳の夜、両親が話しているのを立ち聞きして知つたことだ。自分は、今の両親に拾われた捨て子である――。

怒りのような、恐怖のような衝動が背筋を貫く。それは自分が触れて欲しくない過去に触れられてしまったからだろうか。あるいは

……。

「知らないわ」

「そう」

ローズは特に詮索もせず、話を続けた。

*

一時期、両者の名は広く有名になり、『永遠の歌姫』と『天使の恋人』のカップルを総称して『惹かれ合う双葉』とするようになった。ある時、非常に仲が良い永遠の歌姫と天使の恋人のカップルが生まれた。彼等が誕生した町の中で一番睦まじいと言われ、ポケモン達が傍目から見ても羨む程だった。それこそ、世界に災厄を齎したのだ。

その『惹かれ合う双葉』は片時も離れようとしなかった。いや、離れられなくなっていた。一時的に互いが互いを嫌悪することはあれ、それにより双方のどちらかが離れようとしても動けなくなっていたのだ。精神的に、ではなく物理的に。そこから絶望は始まった。ある朝、2匹の知り合いのポポッコが彼等の家のドアを開けた。そこで見たのは、誰も見たことが無さそうなポケモンだった。その当時の『永遠の歌姫』はデンリユウ、『天使の恋人』はキマワリであったのだが、そのポケモンは両方の種族の身体的特徴を兼ね合わせていた。

*

「……記述では、そのポケモンは融合体だった、と言われてるの」「じゃあ、融合したポケモン達はどうなったの？」

エレナは訊ねた。その問を、ローズは数秒かかって噛み砕いていた。沈黙の時間が流れ、唾がエレナの喉を流れ落ちていく。

「……破壊されたわ。彼等が破壊行動を起こしたからね。その日にまた、次世代の『惹かれ合う双葉』が生まれた」

「……アンタ、アタシ達が、危険な存在だって言いたいのか？」

エレナの間に、ローズは首を縦に振った。そして飛ばすのは、付け加えるような一言

「その通りよ。強いて言うなら次世代の『永遠の歌姫』か『天使の恋人』どちらかがもう生まれないようにしたかったの」

だから、あの時にエレナを眠らせた。ローズの瞳はそう語ってい

た。エレナはローズにまた眠らされるのだろうか。そう思って身構えたが、意外な言葉を後ろから聞いた。

「君の言い方から察すると、災厄がどういふものかも分かってないんじゃない？　嘘かもしれないじゃないか」

「ヒヨウサ！」

姿勢は寝ているままだが、その瞋らな瞳はしつかり開いていた。表情も生氣は燈っていて、エレナは心配をかける必要があるかどうか迷いを馳せた。ローズは意識の対象をエレナからヒヨウサに変更した。

「でもね、火の無き処に煙は立たぬと言うでしょう？　記録は殆ど読めなくなってるけど、何かあったということだけはちゃんと分かっているの。沢山の語り部がそう言っているのよ」

ローズは若干忌々しげにヒヨウサを見つめながらそう言った。

*

ヒヨウサが退院したのはそれから数日後のことだった。ミルトンクは彼を氣遣って「大丈夫かい？」と訊ねたが、彼は何ともないと答えておいた。強がっていたわけではなく、彼の体に何ら支障がなかったからだ。

「……ねえ、ローズの言ってたこと、どう思う？」

「災厄のこと？」

病院前でガルバが迎えに来るのを待ちながら、ヒヨウサとエレナは会話を続ける。エレナは災厄のことをガルバとクリストに話そうかどうか迷ったのだが、結局黙っておくことに決めた。

「……何でガルバ達に黙っておいたの？　力になってくれたかもしれないのに」

「アイツらじゃ足手まといになるからよ」

というのがエレナの抗弁であるが、ヒヨウサはそれが嘘であると気付いていた。本当は優しくも、照れ屋である彼女は「ガルバとク

リストを巻き込みたくない」という自分の気持ちを素直に表現できないのだが、自ら命を断つつもりはないのでヒョウサはそのことは言及しない。代わりに別の言葉を投げかける。

「いや、落石注意地帯で頭上に落ちてきた岩を片手で受け止めた伝説を持つガルバが、足手まといになることはないと思うけど」

その言葉を受け止めて、エレナは一瞬考え込んだ。

――戦闘沙汰になる、とても言いたいのかしら？

「？ 僕の顔に何かついてる？」

そう言われて、エレナはヒョウサの顔をずっと見つめていたことに気付いた。

「なっ、何でもないわよ」

慌てて顔を反らしたが、頬の火照りを抑えることはできなかった。首筋が熱くなっているの、そこも赤くなっているだろうと思った。

――ダメ、熱さは氷タイプにとって天敵なんだから。

下らないことを考えて自分を誤魔化そうと努力したが、体温はどんどん上昇していった。そこに、ヒョウサが彼女にとっては余計なことをした。

「エレナ、熱があるんじゃない？ 顔が赤いけど」

端的に表記すると、顔を近づけたのだ。ただそれだけなのに、エレナの体感温度は瞬く間に急上昇した。

> i 3 4 4 2 7 — 1 8 3 7 <

「何でもないわよ馬鹿！ 顔を近づけるな馬鹿！」

エレナはヒョウサを詰った。無意識に冷凍ビームを放ってヒョウサを凍らせてしまったというのはまた別の話。

「おい、これはどういうことだ」

後に到着したガルバは、頬を紅潮させているエレナと一つの氷塊と化していたヒョウサを見て、辟易するしかなかったらしい。クリストは面白そうに笑っていたのだが。何にせよ、落石注意地帯で頭

上に落ちてきた岩を片手で受け止めた伝説を持つガルバがヒヨウサを運ぶのはそう難しいことではなかった。

「そう言えばエレナ、お前『音魂』使いの集会があると聞いたことはないか？」

「知らないわ。そういうのはヒヨウサに聞きなさいよ」

「お前、それは無茶というものだ」

ガルバはクレームをつけて「知らないなら構わん。後でヒヨウサに聞こう」と言った。その足をクリストがつつく。

「ねえねえお兄ちゃん、無茶って何？」

「無茶、か？ 何て説明するべきだろうな……うつん……」

説明しよう、そう思っても良い言葉が浮かばない。ガルバは眉間に皺を寄せて脳内で知恵熱を出してまで苦戦していた。そんなガルバを見て、エレナは意地悪そうに呟く。

「アンタ、落石注意地帯で頭上に落ちてきた岩を片手で受け止めた伝説持つてるくせに無茶の説明もできないの？」

「あん？ それとこれとは一切関係な……って何でそんなことを知ってるんだお前？」

エレナには話したこともない伝説を提示され、ガルバは不信感を抱きながら彼女を見た。エレナは躊躇なく、ガルバが担いでいる氷塊を指し示し、言外に「そいつに聞いた」と告げた。

「……」

ガルバは数秒間歩みを止めた。エレナとクリストが彼に数歩分先をとると、ガルバの停止に気付き後ろを振り返った。リングマの中でもガタイの良い彼は、腕に全力を籠めてヒヨウサを地面に叩きつけた。

「死に腐れお喋りピカチュウがああああ？」

「いぎゃああああ！？ どうしたの何かすっごいハッスル状態なポケモンさんがここにひぎえ！」

氷が割れてヒヨウサは動けるようになったが、直後にガルバの容赦なき踏みつけを喰らうことを余儀なくされ、更に氷の破片が所々

に刺さったことにより、氷漬けより悲惨なことになっていた。もう一回病院に戻ることをお勧めされるだろう。

「げふう……ごめんなさいガルバもう二度としませんうがえ」

何はともあれ、心配が錯綜する時間は去ってまた平穏が戻って来た。ヒヨウサはガルバの足の下敷きになりながら、こんな日々がいつまでも続いて欲しいと願っていた。

だが、その願いは無慈悲に見捨てられるかもしれない。ヒヨウサ達を見つめる影を見つけると、そう思わざるを得ないだろう。無論、そのロゼリアはローズだった。彼女はヒヨウサ達から視線を外すと暗い路地裏の中に潜り込んだ。路地裏を出ると、大きな段差が出来ていた。すぐ後ろは建物が聳えているため、足場として機能するのは50センチしかない。だが、今ローズの目の前にいるポケモンにはそんなことは関係ないように見えた。彼は空中に浮いていた。全身をターバンという布で覆っているため種族は不明だが、羽ばたいている翼を見ると鳥ポケモンだろう。

「飄凜盗賊団、貴方の狙いは、本当に彼の……で良いのね？」

「ああ。既に準備は整ってある。今まで助かった」

ポケモンはそう言った。それは、ローズにもう見切りをつけた、という意味ではなくヒヨウサの動向を調べてもらうという彼女との契約を終了するという意味だった。

「そうね、ここでお別れだわ。ばいばい、ミレンス」

ローズは優しく言った。その声が葬送曲であるかのように、ミレンスと呼ばれたそのポケモンは氷空へ飛び去っていった。

D i s s o n a n c e : 1 0 平穩は帰ってきて（後書き）

前書きの詩を読んで背筋が泡立った方もいらっしゃるかもしれませんが。ここで勘違い無きよう記しておきますが、前書きの詩は物語の作風や作者の心情とは一切関係ありませんので、ご心配なく。

さて、今話は専ら章のエピローグと次話からの伏線張りとなっております。ミレンスという謎のポケモンさんの正体はいつか明かされます。……いつになるかは誰にもわからないけどさっ（

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3529u/>

ポケモン文学 ～永遠の歌姫～

2011年11月8日03時18分発行